

〈原著論文〉

# Eriksonによる自我の統合の先にあるもの －後期高齢者における老いの意味とは－

What Follows Ego Integrity Proposed by Erikson  
－The Meaning of Old Age for Old-Old and Oldest-Old－

串崎 幸代<sup>1</sup>

## 要 旨

人は老いることによってさまざまな喪失を体験することが多い。老年期の課題については、そうした喪失などに対処し老いや死を受け入れることが挙げられるが、認知的・精神的な機能が衰退する後期高齢者や認知症の患者において、老いを生きることの意味はどのように考えるべきであろうか。文献を通して考察した結果、人生の最終段階においては他者を信頼して自己を委ねていくという課題が存在し、高齢者が認知的機能や自己意識を手放して生きることの意味や希望は高齢者を見守る側の他者に託されると考えられた。

キーワード：老い, エリクソン, 自我の統合, 高齢者, 価値の転換

Old Age, Erikson, Ego Integrity, Old people, Transformation of value

## 1 はじめに

人は生きている限り年をとる。高齢化社会を迎え、「どのように老いるのか」「老いてなお元気に生きるにはどうしたらよいのか」「老いた人をどのようにケアするのか」は身近で関心の高いテーマになりつつあるように思われる。人は老いていくプロセスにおいて、さまざまな喪失を体験することが多く、若い頃のように思い通りにはなりにくい身体的・知的・精神的機能をもって、それらの体験に対処することを求められる。発達心理学において、老年期の課題は「身体的な力や健康の衰退に適応していくこと」<sup>1)</sup>や「老いや死を受け容れること」<sup>2)</sup>とされるが、認知的・精神的な機能が衰退する後期高齢者や認知症の患者の発達はどのように意味づけることができるだろうか。本研究では、文献をもとに考察を深め、老いの体験に対する理解を深めるための視点を提供する。

## 2 老いと喪失

人は老いることによって様々な喪失を体験することが多い。

藤野<sup>3)</sup>は、老年期におこる心理的問題を整理して、「身体的及び精神的健康」「経済的自立」「家族や社会との人間関係」の3つの喪失体験を挙げ、高齢者は、こうした喪失体験のために抑うつ的になったり、妄想や心気症状などに陥りやすくなるとしている。また、老年期に深まる「孤独感」は自己のあり方や時間的展望に影響し、生きる意味の喪失や未来展望の閉塞に関連している可能性が高いと指摘している。

平山<sup>4)</sup>もまた、「人は老いることによって、それまで獲得してきたものを徐々に失ってゆく」として、高齢者が深く傷ついて挫折感を味わったり、精神的危機を引き起こしたりしやすい喪失体験として、「自分が長い間、計画してきたことが期待どおり成就できないこと」「慣れ親しんできた場所から離れること」「家族との信頼関係を失うこと」「定年

1 Yukiyo KUSHIZAKI 千里金蘭大学 生活科学部 児童学科

受理日：2014年10月15日

査読付

退職ないし引退による地位、役割の喪失とそれにもなう収入の減少など」「病氣や死別による愛する人との別れ」「病氣や身体の衰えによる健康や活力の喪失と死の不安」「加齢に伴う精神機能の減弱」を挙げている。そして、「老いにもなうそうした喪失体験が人間にとって脅威となるのは、当事者がそれを失うことによって、その存在基盤そのものである『自己』をも失ってしまうと考えるからである」と述べている。

このような喪失体験については、老年期の場合には喪失されるであろうことが予測しやすいがために、それに適応するための準備ができる側面がある<sup>5)</sup>一方で、自らの死が目前に近づいてきていることを予測し、それを感じながら、その現実と死の不安に対処せねばならないという難しさがある<sup>6)</sup>。しかも、高齢者は、「もし何かしらの喪失が起こったらもう取り返しがつかないのではないか」という不安を感じており<sup>7)</sup>、実際に失った場合に取り返しがつかないことも少なくない。服部<sup>8)</sup>が「身体的な病氣や死への恐怖のみならず、痴呆に対するこだわりや恐れも加わって、人生究極の老いの受容はそれほどやさしいものではない」と指摘している通り、これらの喪失体験や老いにまつわる不安への対処が容易ではないことは、高齢者の自殺の高さからも伺い知ることができる<sup>9)</sup>。

しかも、老年期において特異な点は、適応することが容易でないこれらの喪失体験に対して、最も適応する能力が衰えた状態で取り組まねばならないことである<sup>10) 11)</sup>。また、老いは命ある限り深まり、時とともに変化していくものである。つまり、「老いゆく過程、ほげゆく過程は持続的だから、身の丈に合った生き方は発見し続けられねばならない」<sup>12)</sup>がために、高齢者は進行する自らの状態に応じてその都度対処していくことが求められる。

それでは、高齢者は、このような喪失や孤独に彩られやすい老いの体験とどのようにしてつきあっているのだろうか。

Bühler<sup>13) 14)</sup> は、老年期には、低下していくエネルギーについて把握し、身体的衰えや経済的低下、他者への依存の増加と折り合い、可能な範囲で自分の目標や興味に取り組むことが必要であるとしている。また、人生に対する満足感は、人生の目標が満たされていると感じられる程度が、身体的低下や他者への依存からくる不満の程度を上回るかどうかに関連するとしている。

竹村<sup>15)</sup> は、先行研究から、自らの体力の衰えや病氣、身近な人との死別といった“統制困難な出来事”に対して適応的に対処している高齢者は、共通して二次的コントロール<sup>16)</sup> を用いていると指摘し、面接調査を通して、二次的コントロールの高い高齢者が用いる方略を明らかにした。二次的コントロールとは、例えば、体力や健康が衰退していくといった状況に合わせて自分の認知・行動・目標などを変えていくというように、状況と自己とのバランスを調整する過程を表す概念である。その結果、二次的コントロールの高い高齢者は、(1) 体力や健康などの自己資源が低下し自分の望みとのバランスが崩れたことを自覚すること、(2) 多様な生き方に対する知識や理解があると、身体や健康の衰退を自律的に受容できること、(3) 残された自己資源を現実的に査定することが大切だという知識や理解があると、現在の目標や認知、行動を身体や健康の衰退に合わせて調整できること、(4) 老いの受容や自己を調整することを維持するために、身近な人と交流し、気晴らしをして、忍耐強く統制困難な出来事とつきあっていることが示された。ただし、この研究の対象者は、認知機能や心身の健康状態が比較的高い前期高齢者であり、後期高齢者や、重い障害を持つ高齢者では、異なる結果が生成される可能性があると考察されている。

下仲<sup>17)</sup> は、人格、身体的能力、知能、創造性、自己概念、不安特性といった諸機能に関する研究データを展望し、老年期においては、加齢とともに衰退するよりは成熟していく機能の方が優勢であると指摘している。特に、自己概念については、高齢者は自分の過去の成果や現在の自己について他の世代よりも肯定的に受け止めているという結果が得られており、老年期においても自己概念は自己の人生の最終目標に向かって発達していくと考えられる。このことから、特に超高齢期にさしかかる前の老年期においては、成人、中年期における社会生活や家族生活上の義務や役割から解放されて自由な生活を楽しむことができるとしている。

以上より、自己に合わせて状況そのものを変えることが難しい老年期の体験について、高齢者は、現実の状況を見極め、それに合わせて自分自身の物の見方や考え方、価値観、生活の方法を見直し調整することによって対処していることが伺われる。そして、比較的健康な身体や知能の状態を保持することができる老年期前期においては、自己実現がはから

れる方向へ向かう傾向にあることが伺われた。

### 3 老年期の発達課題について

#### (1) Eriksonによる老年期の心理社会的危機

Eriksonは、心理・社会的な自我発達の視点から生涯にわたる発達理論を打ち立てた。彼は人間の一生を8段階に分け、それぞれの時期に固有の葛藤を「人間の成長を健康なパーソナリティがさらされる内外の葛藤という観点」<sup>18)</sup>から発達的な危機として提示した。Eriksonは、以下のように述べ、老年期の心理社会的危機の同調的傾向を「統合」、それと対置される非同調傾向を「絶望」とし、われわれがこれらの危機を解決していくことがその時期の発達的な課題であると考えた。そして、これらの危機に取り組む中で「知恵(英知とも訳される)」という人格的活力を獲得することができるとした。

身体的な限界に加えて、今まで以上にどうにもならないほど限られたように思われる個人的未来に対峙するという重荷を抱えて、ライフサイクルの終わりに近づきつつある人々は、今はもう変えられない過去といまだ知ることのできない未来とを受け入れ、起こりがちな失敗や手抜かりは認め、必然的に起こる絶望感と生き続けるのに欠かせない全体的な統合の感覚との間のバランスをとろうと苦闘している自分を発見する。というのは、おそらくこの時初めて、死がまだ先であるというよりはむしろ間もなくやってきても当然だと認識している自分に気づくからである。ライフサイクルについて特別な展望を持つこれらの人々は、後に続く人々の未来を導く案内人として役立つ位置にあり、また同時に、彼らは、自分自身の未来と全人類の未来を考える上で頼ることのできる案内人を求めて闘わなければならない。<sup>19)</sup>

鏞<sup>20)</sup>は、Eriksonによるこれらの記述をまとめて、「統合」の様態を以下のように整理している。

第一に、人生の最終段階において、それ以前の心理社会的課題をとりいれ、その年齢にふさわしいやり方で再編成をすること。

第二に、発達段階にある同調傾向と非同調傾向のバランスをとること。

第三に、それが現在と過去との連続性として体験

されうること。

第四に、現在生きている世代のなかでうまくつりあう位置に自分をおき、歴史的連続のなかで自分の場所を受け容れること。

このような「自我の統合」の意味は、「これまでの過去の経験をプラスもマイナスもすべて受け入れ、そこから人生最後のとりくみないし、生き方の姿勢を獲得していくこと」<sup>21)</sup>であり、また、一貫性と全体性の感覚で人生の全体を1つにまとめようとする方向性を持ちつつ「自分自身と自分の生きてきたただ1つの人生に意義と価値を見出し、自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受容すること」<sup>22)</sup>と表現される。具体的には、統合がはかられた人は以下のような人たちであると描かれる。

人生の究極で自分の人生全貌を見渡し、さしたる事業をなさず業績も上げなかったが、子どもを作り育てあげた、あの子たちがこれから力強く生きてくれると嬉しいと感じる人。社会的働き場で与えられた仕事を全うし、失意の中をも生き延びた誇りと満足を感じる人。華々しい功績を世間に示すわけではないが一筋の道をひたむきに歩き、人に支えられ愛されたことへの感謝を抱く人。<sup>23)</sup>

このような「統合」と対置される「絶望」とは、死に直面し、死を拒否したり否認したりし、もはや人生はやり直しがきかないという絶望感や苦しみに陥り、これまでの自分を拒否する状態である。また、「知恵」とは、「死そのものを目前にしての、人生そのものに対する超然とした関心である。知恵は、身体的精神的機能の衰えにもかかわらず、経験の統合を保持し、それをどう伝えるかを学ぶ」<sup>24)</sup>ものとされる。

老年期における発達においては、過去を肯定的に捉え、死を目の前にしてなお不安に圧倒されることなく「生きる」ということに積極的な関心を持ち続け、死後も後世に自分の命や事業、アイデアなどが引き継がれ発展していくという確信と信頼を心を持つ姿が想定されていると推測される。

#### (2) 価値づけられた老いの生き方

(1)では、老年期における心理社会的危機について述べ、統合の状態について整理した。そこには、自分の過去を肯定的に受け止める高齢者のイ

メージが描かれている。

深瀬ら<sup>25)</sup>は、日本人の高齢者20名にErikson et al.と同様の半構造化面接を行い、日本における老年期の心理社会的課題は、「統合対絶望」ではなく「統合対否認・後悔」ではないかと提案した。また、老年期における肯定的側面として抽出された「人生に納得」のカテゴリーの中に後悔の気持ちが含まれていたことについて、これまで、老年期の統合の度合いは肯定的側面をはかる項目のみによって測定されてきたが、統合とは後悔のある人生をどのようにとらえるかで示されるものであり、「人生に納得」のカテゴリーに後悔の気持ちが含まれたのは妥当な結果ではないかと考察した。

統合はこれまでの人生に対する肯定的な評価だけによって成り立つのではないという深瀬らの指摘は、非常に示唆的である。一方、統合の否定的な要素として、「死の否認（自分の死を考えない）」「人生に後悔（自分の力ではどうしようもできなかった人生の後悔があり、それに固執している）」の2つが挙げられていた。しかし、高齢者が死について考えることを先延ばししたり、自分にはどうしようもなかった過去を悔やみ納得できないと思うことを果たして否定的であるとして良いだろうか。

「老年期のアイデンティティの変容過程に関する研究」を行った井口ら<sup>26)</sup>によれば、面接法を用いて事例研究的に高齢者のアイデンティティの様態を調べたところ、「まあまあ的人生だった」「周りに恵まれて、いい人生だった」と述べる「受容型」が比較的多かった一方で、自分の人生は「つまらない」「苦労ばかりだった」「失敗は多いが、いいことはそんなにない」などと答えた「絶望型」も少なくなかったという。つまり、自分の人生を肯定的に評価しない者や、「最後の人生を希薄な意識でなんとなく受身的に生活している人」と表現される姿もまた、一般的な高齢者のありようであると推測される。

ところで、藤野<sup>27)</sup>は、「老い」を理解していくための課題の一つとして、「高齢者以外の者（つまりは研究者）によって、『良い』や『望ましい』などの「老い」に対する価値づけがなされていること」を挙げ、老いを語るうえで「老いに対する適応」や「良い老後」という価値が志向され、老いの否定的な側面から目をそらすということが起こっているのではないかと指摘している。「『老い』について否定的な評価をもっている高齢者に意識改革が提言されてい

るが、否定的にしか思えないものは思えないものとして、受け入れていく方法があっても良いのではないだろうか。否定的にしか評価できないものはできないものとして、そこからどう『老い』と向き合うのか、『老い』をどう生きるのかが重要なのではないだろうか」と述べている。

「発達」という概念は「成長」「成熟」という価値や方向性を内包しており、各発達段階における人間の一般的なありようを基準とし、それをあるべき発達の姿と考える傾向がある。しかし、それを差し引いたとしても、「老い」を生きる高齢者に対して私たちが適応的であると考えられる姿は、「私たちがそうありたいと願う」姿が反映されて、肯定的な側面のみを良しとする価値付けがなされていないだろうか。私たちが「老い」や「老いをどう生きるか」について考える時、例えば、先に例に挙げたようなこれまでの人生を肯定的に評価する高齢者の姿を望ましい姿として思い浮かべることが多く、高齢者をそういった状態に向かわせようとする傾向があるように思われる。「明るい安らかな老後」を求める気持ちは誰にしもあるであろうが、喪失に彩られやすい老年期において、喪失に悲嘆し、とりかえしのつかない自分の行為や決断に納得せず、思わぬ出来事が降りかかった自分の運命に怒り、そして思い通りにならない身体や精神状態で老いを深めていくことに抑うつ的になることは、ある意味で自然な心のプロセスであり、「生きる」という営みが大きく阻害されない限り、そういった高齢者を発達における否定的な状態と捉えるべきではないと思われる。老いに圧倒されたり格闘しながら毎日を重ねている高齢者の体験を、「老いを受容できていない」「受け入れていない」と価値下げすることなく、それぞれの個人の生き方、老い方として尊重していきたい。

### (3) 老衰や認知機能の低下の問題

鑑<sup>28)</sup>は自我の統合に関して、「自動的な作業というより、また自然な現象であるというより、意志的に努力して得られる心的プロセスであることが示されている」と指摘している。このことからわかるように、老いへの対処や人生をまとめて統合していくという作業は、知的・認知的機能や精神機能のはたらきが前提となっている。最近は「認知症等による知能の低下がない限り、人格は生涯発達しつづけるという生涯発達理論が主流になり、あらゆる分野・領域に広まりつつある」<sup>29)</sup>が、裏を返せば、知

能の低下がある場合は人格の発達を考えることができないと解釈される。

しかし、私たちのすべてが、死の直前まで清明な意識状態を保つことができるわけではないだろう。むしろ、健忘、判断力の低下、不鮮明な自己意識などを持ちながら、老年期を過ごす人々は少なくない。また、若年性アルツハイマー病のように、比較的若い時期から認知的機能を失っていかざるを得ない場合もある。この点について、鏞<sup>30)</sup>は、老衰を抱えて生きる人々をEriksonのライフサイクルの発達図式によって理解しようとしても困難がともなうとして、老衰期は老年期のなかでも区別して理解と接近法を得ていかねばならないのではないかと指摘し、次の二つの接近法を挙げている。

第一は、痴呆を直していこうとする努力である。そして第二は、痴呆や老衰を老齢の必然的な随伴現象として受け入れ、その性質を明確にし、それ自体への接近法を考案していく努力である。(略)第二の接近法としては、まだほとんど研究が行われていないが、老衰期における自己意識を明確にし、老衰期におけるアイデンティティ意識を捉え、その様相を明確にするという仕事である。これらは私たちの人生最後の意識と無意識レベルにおける自己のあり方について記述していく主題である。<sup>31)</sup>

認知症や老衰期の高齢者の自己意識を明確にしその心理的発達を個人の人生という枠組みから捉えることは簡単ではないだろう。特に、社会的な適応や生産性を重視する限り、これらの状態は発達停止であり下降であると考えられても仕方ない。そして、そのような視点に立つ限り、やがて自己の健康な意識状態を喪失していくであろう老いの進行は不安で恐ろしいものとなる。ここに、価値の転換が求められる。

#### 4 価値の転換とそこから見えてくる老いることの意味

老いを生きることの意味を見出そうとすれば、老いを体験する主体である高齢者自身も、そして、その高齢者と共に生きる人たちも、根本的な価値の転換が求められるという。

平山<sup>32)</sup>は、「老いはそれまで、当然のこととして考えられてきた既存の価値基準の再検討を促す。

(略) 老年期を迎えたら思春期や壮年期までもっていった価値観の見直しを行う必要がある。それは生き方の根本的転換であり、考え方を180度転換しなければならないという覚悟をもつことが大切である」として次のように述べている。

老いることによって失うものは確かにあまりにも多い。しかし、人生にとってこれまで絶対的な価値であると思っていた健康や財産や生きがいや、それらの諸価値が相対的価値であると認めるようになって、はじめて見えてくる普遍的価値がある。あらゆる虚栄や欲望から離れてみて、人間ははじめて自らのうちに新しい内的自由を獲得することができる。そして、後からくる世代に対して1つの簡潔した模範的な生き方を示せるようになる。<sup>33)</sup>

一方、精神科医でありユング派の心理療法家であるGuggenbühl-Craig<sup>34)</sup>は、老いた者の肯定的な姿として人々の心をとらえてきたステレオタイプな「老賢者」のイメージは、私たちに老いの現実を直視させるかわりに逆を強調することで防衛的に不安を緩和しようとする働きが作用しているとして、「老賢者」のイメージは「老愚者」によって補完されるべきだと述べる。「老愚者」は老いの愚かさを受け入れ、賢明に見えるよう努力する必要もなく、気分任せ、子どものように無思慮でおろかに行動するが、逆説的に、「防衛的な知恵よりもむしろ、ある特別な種類の知恵」、「月並みな円熟した知恵よりもずっと価値のある特別な魂の性質」が見出せると主張する。自分の愚かさを受け入れ愚かに生きることは簡単ではないが、それは縛りから解放された自由の獲得であり、ここに価値の変換によってもたらされる知恵と魂の力があるといえる。

このように、価値の変換は、高齢者本人にとっても重要であるが、高齢者と接する家族や介護者、さらには社会にとっても本質的な意味を投げかける。

河合<sup>35)</sup>もまた、易しい言葉を用いて、『『老人は何もしないから駄目』と言うが、『老人は何もしないから素晴らしい』と言えないだろうか。青年や中年があればするこれもすると走り回っているのは、それによって、生きることに内在する不安をごまかすためではなかろうか。何もせずに『そこにいる』という老人の姿が、働きまわる人々の姿を照射して、不思議な影を見せてくれるのである』と述べ、何もしないでそこにいることの逆説的な価値を示し

ている。

また、認知症のケアにたずさわってきた精神科医の小澤<sup>36)</sup>は、「痴呆という病に光明を見ようとすれば、規範、常識、利害、役割……からある程度自由になることが必要なことだけは確かである」とし、新たな生き方を見出す高齢者の存在は個人的な達成を超え社会における存在の価値を持ち始める、と述べる。そして、「痴呆を病むということは、ひとの手を借りることなく暮らし生きていくことが困難になるということだから、ひととひととのつながりに依拠する部分が大きくなるということである。とすれば、希望はこの関係性にみいだされねばならない」<sup>37)</sup>と続ける。

このように考えれば、「周囲の人を信頼して自己意識をなくしていく自分を委ねていく」、つまり、自我を手放していくという難しいプロセスが人間の最後の課題であると考えられる。そして、小澤が指摘するように、高齢者が生きるものの意味や希望は高齢者の側にいる者の心とケアに託される。少し長い、神谷の記述を引用する。

(死後のことは)人間のこころやあたまではわからないとするのが、人間の限界を素直にみとめることではなかろうか。「わからないこと」に耐えるには、世界を支えるものへの「基本的信頼」が乳児期から育ち、一生を通じて深められていなくてはならないのだろう。こうみえてくると、人間のこころの旅の一番大きな基盤となるものはすでに乳児期に用意されることがわかる。そういう意味で人間の一生は晩年になって乳児期に回帰しようとする、一つの円環を形づくっているようにもみえてくる。少なくともこころの旅にとって時間というものとはふつう一直線に「無」に向かって流れていくものではないと感ぜられるのではなかろうか。<sup>38)</sup>

乳児の「基本的信頼感」は、養育者があたたかい愛情を注ぎ、乳児からのたらしきかけにタイミングよく応答を返すことによって築かれる。最晩年における老いの意味や生の意義もまた、高齢者に寄り添う人の思いやケアによって成立するといえる。私たちの人生のはじまりと最後は、人によるあたたかい応答によってこそその存在が支えられるのである。そういった意味でも人生は一つの円環を描き、その円がつながって、命が受け継がれていくのである。

## 5 おわりに

河合<sup>39)</sup>は「老いのみち」という本の冒頭で、「みちは未知に通じる。老いの道は老いの未知である」としている。未来は未知の領域であり、ふかまりゆく自らの老いの様態もまた未知である。その老いを私たちそれぞれがどのように生きていくのかは、非常に個別的である。その未知の道のりを最後まで安心して歩んでいくためにどのようなことが必要か、今後もケアという概念を鍵に考察を深めていきたい。

## 文献

- 1) Havighurst, R.J., Human development and education, New York: David McKay, (1953) 荘司雅子訳, 『人間の発達課題と教育』, 牧書店 (1958)
- 2) Erikson, H.H. & Erikson, J.M., The life cycle completed, New York: W.W. Norton, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳, 『ライフサイクル その完結』, みすず書房, (2001)
- 3) 藤野好美, 「「老い」の理解についての一考察」, 福祉と人間科学, 7, 37-46, (2006)
- 4) 平山正実, 「ライフサイクルからみた老いの実相」, 無藤隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・南博文・やまだようこ企画・編集, 『老いることの意味』, 金子書房, 153-188, (1995)
- 5) 前掲3)
- 6) Peck, R.E., Psychological developments in the second half of life, W.C. Sze (Ed.), Human life cycle, New York: Jason Aronson, 609-625, (1975)
- 7) 三浦朱門, 『老いは怖くない』, PHP文庫, (1995)
- 8) 服部祥子, 『生涯発達人間論』, 医学書院, (2000)
- 9) 下仲淳子, 「高齢化社会における新しい老人像」, 無藤隆・麻生武・内田伸子・落合良行・楠見孝・南博文・やまだようこ企画・編集, 『老いることの意味』, 金子書房, 81-116, (1995)
- 10) 小澤勲, 『痴呆を生きるということ』, 岩波新書, (2003)
- 11) 浜田澄子, 「映画『地方老人の世界』を作って」,

- 伊藤光晴ら編〈シリーズ老いの発見〉『老いのパラダイム』, 63-82, (1986)
- 12) 前掲10)
- 13) Bühler, C., The curve of life as studied in biographies, *Journal of Applied Psychology*, 19, 405-409, (1935)
- 14) Bühler, C., Old age and fulfillment of life with considerations of the use of time in old age, *Vita Humana*, 4, 129-133, (1961)
- 15) 竹村明子・仲真紀子, 「身体や健康の衰退に調和するための高齢者の対処: 二次的コントロール理論を基に」, *発達心理学研究*, 24(2), 160-170, (2003)
- 16) Rothbaum, F., Weisz, J.R., & Snyder, S.S., Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control, *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37, (1982)
- 17) 前掲9)
- 18) Erikson, E.H., *Identity and the life cycle*, New York: W.W. Norton & Company, (1959)
- 19) Erikson, J.M., Erikson, E.H., & Kivnick, H.Q., *Vital involvement in old age*, N.Y.: W.W. Norton & Company, (1986) 朝長正徳・朝長梨枝子訳, 『老年期』, みすず書房, (1990)
- 20) 鑑幹八郎, 『アイデンティティとライフサイクル論』, ナカニシヤ出版, (2002)
- 21) 前掲20)
- 22) 前掲8)
- 23) 前掲8)
- 24) 前掲19)
- 25) 深瀬裕子・岡本祐子, 「老年期における心理社会的課題の特質: Eriksonによる精神分析的個体発達の分化の図式 第Ⅷ段階の再検討」, *発達心理学研究*, 1(3), 266-277, (2010)
- 26) 井口明子・鑑幹八郎・一丸藤太郎, 「老年期のアイデンティティの変容過程に関する研究」, 『文部科学研究助成「ライフサイクルにおけるアイデンティティの再編過程に関する研究」研究報告書』, 75-84, (1996)
- 27) 前掲3)
- 28) 前掲20)
- 29) 前掲3)
- 30) 前掲20)
- 31) 前掲20)
- 32) 前掲4)
- 33) 前掲4)
- 34) Guggenbuhl-Craig, *Die N ä rrischen Alten*, Schweizer Spiegel Verlag AG Zürich (1986) 山中康裕監訳, 『老愚者考』, 新曜社, (2007)
- 35) 河合隼雄, 『老いのみち』, 読売新聞社, (1991)
- 36) 前掲10)
- 37) 前掲10)
- 38) 神谷美恵子, 『こころの旅』, 日本評論社, (1974)
- 39) 前掲35)

